

界の動物資源”特集。畜産の研究, 49: 1,19-122.

学会発表等

—英文—

- 1) Kawamoto, Y. (1994): Genetic differences in *M. fascicularis* east and west of the line. In: Symposium "Alfred Russel Wallace: The man, the line, and the monkey. The 15th congress of the International Primatological Society (Bali, Indonesia, August, 1994). Abstracts: p.267.
- 2) Kawamoto, Y., Watanabe, K., Matsubayashi, K., Takenaka, O., Watanabe, T., & Suryobroto, B. (1994): Introgression and gametic disequilibrium in a contact zone of *Macaca tonkeana* and *M. hecki*. The 15th congress of the International Primatological Society (Bali, Indonesia, August, 1994). Abstracts: p.181.

—和文—

- 1) Gurja Belay, 嶋田 誠, 川本 芳, 庄武孝義 (1994): ニホンザル・ツバキ群における遺伝的変異。第10回日本霊長類学会(1994年6月, 東京)。霊長類研究, 10: 159.
- 2) 川本 芳, Charal Eakavibhata, Puttipongse Varavudhi (1994): タイの黄体色カニクイザルに関する集団遺伝学的調査。第10回日本霊長類学会(1994年6月, 東京)。霊長類研究, 10: 163.
- 3) 鈴木樹理, 川本 芳, 竹中 修, 石田貴文, Puttipongse Varavudhi (1994): タイに生息するマカクの形態学的特徴。第10回日本霊長類学会(1994年6月, 東京)。10: 159.

系統発生分野

茂原信生¹⁾・相見満・高井正成

研究概要

A) 古代日本人の形質人類学的研究

茂原信生

東北から中国地方にかけての縄文時代から江戸

時代に至る古代人、特に縄文時代人の地方差を中心に調査し、日本人の由来や地方変異について研究している。

B) 古代日本犬の頭蓋骨の研究

茂原信生

古代日本犬の頭蓋骨の形質の変遷を調査し、時代的な変化とともに人との共通点が多く見られる咀嚼器官の退化様式を明らかにする研究を行っている。

C) 霊長類の咀嚼器官の変化様式の研究

茂原信生

化石人類からヒトに向かう変化のなかで咀嚼器官の退化は重要な意味を持っている。その退化様式を言語に関する器官の保存や退化を補償する形質の発達との関係について研究を行っている。

D) インドネシアにおける第4紀霊長類の研究

相見 満

インドネシアの現世及び化石霊長類の系統・進化・分類について、詳細な研究をおこなった。

E) 南アメリカにおける第三紀の化石霊長類の研究

高井正成

(1) ボリビア国のサジャ地域において後期漸新世(約2500万年前)の地層の発掘調査をおこない、最古の広鼻猿類化石 *Branisella* の新標本を発見した。この標本の系統的記載をおこないながら、広鼻猿類の起源に関する問題について研究をおこなっている。

(2) コロンビア国のラベンタ地域において中期中新世(約1500万年前)の地層の発掘調査をおこない、現生広鼻猿類に近縁なさまざまな化石霊長類の標本を発見した。これらの化石種と現生種との関連性をもとに、現在の広鼻猿類の形態的な多様性について系統分類学的研究をおこなっている。

F) 中央アジア地域における歯科人類学的研究

高井正成

中央アジア地域の現代人(94年度はモンゴル共和国のモンゴル人)を対象に、歯科人類学的調査をおこなっている。歯科疾患調査として食生活の変化による歯科疾患の増加について検討し、歯科人類学的調査として歯列の印象採得をおこない、同じモンゴロイド系のタジク人・現代日本人との比較検討をおこなっている。

1) 1995年2月1日着任

論文

—英文—

- 1) Shigehara, N. (1994): Human skeletal Remains of the middle to late Jomon Period from inland Kitamura Site, Nagano Prefecture. *Anthrop. Sci.*, 102(4): 321-344.
- 2) Shigehara, N. (1994): Morphological Changes in Japanese Ancient Dogs. *Archaeozoologica*, 4: 78-94.
- 3) Subhavan, V., Pramankij, S., Matsumura, H., Shigehara, N., & Ohshima, N. (1994): The Prehistoric Human Remains from the Tam Nai U-Bol, Amphoe, Sai-Yok, Thailand. *Bull. Natl. Sci. Mus., Ser. D*, 20: 23-35.
- 4) Takai, M. (1994): New specimens of *Neosaimiri fieldsi* from La Venta, Colombia: a middle Miocene ancestor of the living squirrel monkeys. *J. Hum. Evol.*, 27: 329-360.
- 5) 土の江戸時代人骨. 福島県文化財調査報告書第307集, 293-321.
- 10) 茂原信生 (1994): 塩喰岩陰遺跡 (福島県) 出土の縄文時代人骨. 福島県文化財調査報告書第169集, 3-14.
- 11) 茂原信生 (1995): 米田遺跡 (岡山県: 鎌倉~室町時代) 出土の人骨と犬骨. 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告, 101: 61-68.
- 12) 茂原信生 (1995): 南城ノ台貝塚出土の縄文時代早期犬骨. 城ノ台南貝塚発掘調査報告書, 266-269.
- 13) 茂原信生 (1995): 南城ノ台貝塚出土の縄文時代早期人骨. 城ノ台南貝塚発掘調査報告書, 254-265.
- 14) 高井正成・松野昌展 (1994): パキスタン最北部フンザ地域における歯科人類学的調査. *ヒマラヤ学誌*, 5: 17-30.

報告・その他

—和文—

- 1) 相見満 (1994): 学名の話(19) 金絲猴は *Rhinopithecus*か *Pygathrix*か. *モンキー*, 252: 253: 9-10.
- 2) 相見満 (1994): 学名の話(20) *Papio*はサヴァンナヒヒの属名かそれともマンドリルの属名か. *モンキー*, 254: 9-10.
- 3) 相見満 (1994): 学名の話(21) 第3のチンパンジー. *モンキー*, 255: 16-17.
- 4) 相見満・高畑由起夫 (1994): 日本の哺乳類 18 ニホンザル. *哺乳類科学*, 33: 141-157.
- 5) 松林公蔵・高井正成 ほか (高知医科大学ワールド医学研究会) (1995): インカの里びと. 1-379p. 高知, 高地新聞社.
- 6) 松野昌展・高井正成 (1994): パキスタン最北部フンザ地域における歯科疾患調査. *ヒマラヤ学誌*, 5: 31-37.
- 7) 桜井秀雄・茂原信生 (1994): 塩喰岩陰遺跡 (福島県) 出土の哺乳動物遺存体. 福島県文化財調査報告書第169集, 15-46.
- 8) 茂原信生 (1994): 忘れられた歯—犬歯の人類学. *歯界展望*, 84(5): 1220-1225.
- 9) 茂原信生 (1994): 本飯豊遺跡 (福島県) 出
- 1) 相見満 (1994): コノハザルのスマトラ内陸部での分布境界について. 第10回日本霊長類学会 (1994年6月, 上智大学). *霊長類研究*, 10: 129.
- 2) 茂原信生・松村博文・西沢寿晃 (1994): 長野市内塩崎遺跡群出土の弥生時代人骨. 第48回日本人類学会・日本民族学会連合大会 (1994年10月, 鹿児島大学). *Anthrop. Sci.*, 103: 170.
- 3) 高橋秀雄・山下真幸・茂原信生 (1994): 頭蓋骨のビデオ画像から算出された計測値の誤差. 第48回日本人類学会・日本民族学会連合大会 (1994年10月, 鹿児島大学). *Anthrop. Sci.*, 103: 168.
- 4) 高井正成・瀬戸口烈司 (1994): 上顎小白歯の構造から見た広鼻猿類の進化. 第10回日本霊長類学会 (1994年6月, 上智大学). *霊長類研究*, 10: 146.

学会発表等

—和文—

- 1) 相見満 (1994): コノハザルのスマトラ内陸部での分布境界について. 第10回日本霊長類学会 (1994年6月, 上智大学). *霊長類研究*, 10: 129.
- 2) 茂原信生・松村博文・西沢寿晃 (1994): 長野市内塩崎遺跡群出土の弥生時代人骨. 第48回日本人類学会・日本民族学会連合大会 (1994年10月, 鹿児島大学). *Anthrop. Sci.*, 103: 170.
- 3) 高橋秀雄・山下真幸・茂原信生 (1994): 頭蓋骨のビデオ画像から算出された計測値の誤差. 第48回日本人類学会・日本民族学会連合大会 (1994年10月, 鹿児島大学). *Anthrop. Sci.*, 103: 168.
- 4) 高井正成・瀬戸口烈司 (1994): 上顎小白歯の構造から見た広鼻猿類の進化. 第10回日本霊長類学会 (1994年6月, 上智大学). *霊長類研究*, 10: 146.

—英文—

- 1) Takai, M. & Setoguchi, T. (1995): Sexual dimorphism and polymorphism in *Neosaimiri*, a middle Miocene form from Colombia. 64th Annual Meeting of American Association of Physical

Anthropologists (Oakland, California, March-April, 1995). Am. J. Phys. Anthropol., suppl. 20:208.

社会生態研究部門

生態機構分野

杉山幸丸・森 明雄・山極寿一・松村秀一¹⁾

研究概要

A) 西および中央アフリカに生息する大型類人猿の行動・生態学

杉山幸丸・山極寿一・山越 言²⁾

全個体識別のもとに長期追跡してきたギニア国ボソウの野生チンパンジーについては、堅果割りを初めとする道具使用行動の詳細な観察とVTR記録の分析、整理を進める一方、野外実験も含めて、道具使用行動全般について発達と伝播の記録・分析を行った。また、近隣個体群との遺伝的・文化的交流関係の分析のため、隣国のコートジボアールにまで広がるニンバ山地での調査を開始した。さらに、生息地の資源量測定と土地利用、採食量把握の資料を収集した

ガボン国プティ・ロアンゴ保護区では、同所的に生息するゴリラとチンパンジーの生息密度を調査し、海岸林に両種が比較的高い生息密度で生息しており、互いに遊動域を重複させて共存していることが明らかになった。

B) エチオピアに生息するヒヒ類の研究

森 明雄

ヒヒ類の重層社会を行動学的に分析することを目標にしている。昨年からは、エチオピア南部アルシ州で見つけたゲラダヒヒのポピュレーションの調査を行っている。今年の調査では、ゲラダヒヒのヒョウに対する防衛行動の観察や子殺しが行われた証拠を得るなど、新たな発見があった。さらに、ユニット構造が従来の観察に比べて緩やかであるなどの特徴が得られた。これらの新たな発見が得られたのは、新ポピュレーションが、従来観察されたものとは地域的に大きく離れていることや、生息環境が異なるためであると考えられる。さらに、バレー州では、マントヒヒとアヌビスヒヒの雑種化の様相を調べるために、広域調査も行った。

C) スラウェシマカクの研究

松村秀一

マカクの社会行動の進化に関する比較研究の一環として、インドネシア・スラウェシ島に生息するムーアモンキーの野外研究を続けている。1990年以來の資料の分析を進め、彼らの社会交渉の特徴を明らかにするとともに、その進化に関するモデルを提出した。また、 α オスの交代が起こった後の集団内の社会交渉に関する現地調査を行った。

D) ニホンザルの採食・繁殖生態と個体群動態の研究

杉山幸丸・森 明雄・山極寿一・

Joseph Soltis³⁾・Vanessa J. Hayes⁴⁾・

Xavier Domingo Roura⁵⁾

ニホンザルの個体の社会的地位と採食・繁殖戦略との関係の解明のため、大分県高崎山、宮崎県幸島、鹿児島県屋久島の餌づけ群および自然群を対象に研究を進めてきた。食物の時間的、空間的分散の変化のもとで性、年齢、社会的地位の相違により採食行動にあらわれる差の把握につとめ、また、栄養量測定に基づく摂取栄養量の把握と、それらが繁殖成功度と関係している様を検討してきた。特に幸島群では、採食スピードの時間的変化の解析と性成熟の遅滞現象に焦点を置き、それらに関わるデータの収集と分析を試みている。また、一時的食物貯蔵庫としての頬袋の使用を、性・年齢・順位との関係で調べた。これは所内エンクロージャー群でも調べ、頬袋容量の計測も行った。

屋久島では、最も果実の種類が豊富な10-11月にかけて、野生ニホンザルの採食様式を調査し、異なる果実の選択にしたがって群れの遊動コースが変わり、これが群れ間の出会いに大きく影響していることが明らかになった。また、朝、昼、夕刻という異なる時間帯で採食する果実の種類や採食頻度が異なることも判明した。

一方、社会、遺伝子情報、器官調節分野と共同で所内放飼集団において性行動、ホルモン測定と父性判定に基づく両性の繁殖戦略を研究した。これらの戦略と関連して順位、繁殖成功度、個体群動態の長期資料を高崎山および幸島において収集した。

さらに、ニホンザルの全生息数を推定しその動

1)1994年12月1日付けて助手に採用 2)大学院生

3)研究生 4)日本学術振興会外国人特別研究員

5)文部省国費研究留学生